



(写真左上) 山小屋の前で。
(写真右下) 女性メンバーは3人のみ。「ポッチャリーズ」と呼ばれていて、中央が著者。



13人の力で建てた山小屋

鈴木 雅子

パナソニック 取締役専務執行役員

良い会社、良い仲間恵まれて、今の私がある。現在は、株式会社パソナの専務として多くの仲間たちに支えられて仕事をしているが、学校を卒業してすぐに入社したのは日本郵船株式会社であった。

会社のスキー部に所属し、オフシーズンは大好きな山登りや旅をして歩いた。仲間たちと一緒に、ずいぶんといろいろなところに出かけたものである。ある時、そんな仲間たちで「何か集大成として形に残るものを作ろう」ということになり、山小屋を建てるという突拍子もないことを思いついたのだ。

高度成長期とはいえ、費用を出せる仲間を募り、それぞれの思いの総和を形にするのは並大抵ではなかつた。

1974年12月24日、オープンパーティーで手製のロングスカートを着てクリスマスソングを歌ったのが昨日のことのようによみがえる。あれから約30年。山小屋は古びたが、扉を開けると今でも木の香りがする。海外駐在をしていますが、日本に戻ると必ずここに足を運ぶ。

若かったとはいえ、ひとつのこゝとを成し遂げるために勇気を持って本音で話し合いぶつかったことが、今でもひとつの糧として残っている。

た費用もまちまち。好きなことを言い合うので意見が対立することもあった。何度も「もう無理」と思う場面もあったが、実現することができたのは奇跡に近いと今でも思う。

人、家族で使う人、現在も思い思いに使い続けている。たまに13人の仲間たちが集まると、すっかり昔に戻って朝まで語り合う。それぞれが50代から60代にさしかかり、そろそろ引退の年齢に近づいているが、山小屋もリフォームして、また時間を作ってみんなで山小屋に集まれたら楽しいだろう。

た。しかしそこに13人のメンバーが集い、その後30年間の絆を結ぶことになる。まずは年間を通して使えるようにと、場所は北軽井沢に決めた。建てたのは、輸入したカナディアンシーダーハウス。年齢も部署も様々、出した費用もまちまち。好きなことを言い合うので意見が対立することもあった。何度も「もう無理」と思う場面もあったが、実現することができたのは奇跡に近いと今でも思う。

私	の	
思	い	出
写	真	館